

聖書：ヤコブ 1：19～25

説教題：聞いて実行する人に

日時：2017年8月6日（朝拝）

ヤコブは試練の中にあるユダヤ人クリスチャンたちにこの手紙を書いています。彼は冒頭の2節で「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」と語りました。試練それ自体は誰にとっても喜ばしいものではないでしょうけれども、それは私たちの霊的成長と救いのゴールに達することのために是非とも必要なプロセスであるということでした。前回見た 12～18 節では、試練の中で神を疑ってはならないと言われました。神が私を誘惑したと言って悪に屈してはならない。私たちの会うどんな試練にも、良いものだけを与える神の意図がある。その神を信じて耐え抜く歩みに進むように！と勧められました。では具体的に試練の中で私たちはどう取り組みれば良いのでしょうか。今日の 19 節でヤコブは「愛する兄弟たち」と呼びかけて、そのことを語って行きます。新改訳は「あなたがたはそのことを知っているのです」と訳していますが、欄外の別訳のように「知っておきなさい」と命令形で訳すこともできます。この手紙では「兄弟たち」という呼びかけと命令がセットになっている場合が多いため、ここも命令形で訳す方が良いと思われまます。果たしてヤコブは何をわきまえるように！と語っているのでしょうか。大きくこの部分を二つに分けて見て行きたいと思います。

まずヤコブが語っているのは「聞くには早くあれ」ということです。そしてこれと関連して「語るには遅く」また「怒るには遅く」と言われています。この「聞くこと」「語ること」「怒ること」の三つには相互的な関連があるでしょう。よく聞く人、聞くに早い人は、どのような特徴を持つのでしょうか。その人はすぐには語りません。まず相手の語ることを聞いてから自分の言葉を話します。単に順番を待ってそうするだけでなく、相手の話をよく思い巡らしてから語ることで性急な発言の仕方をしません。その反対に良く話す人はどうでしょうか。たいてい人の話を良く聞いていません。自分の意見を語ることにばかり関心があります。そのため、他の人がまだ話しているのに途中で割り込み、ささげって、自分が言いたいことを話し始めます。そしてその発言は面白おかしいほど前の人が話していた内容を受け継いでいないものです。怒りに関してもそうでしょう。聞くに早い人は相手の立場も十分考慮しますので、性急には怒りません。しかし怒りっぽい人は相手の話によく耳を傾けず、自分の立場からだけ聞いているので、たった一つ

の言葉でカチンと来て激しく反応します。

ところでヤコブはなぜここで「聞くには早く」という勧めをしているのでしょうか。前後関係を見ると、それは人に聞く態度は神の御言葉に聞く態度と密接に関連するからでしょう。前の 18 節で見たように、私たちは真理のみことばによって新しく生まれましました。この新しいいのちをこれからも成長させ、発展させてくれるのもやはりみことばです。ですからこの御言葉に私たちがどう接するかは、私たちにとってとても大切な問題です。これについて語る際、ヤコブが言っているのは、神の言葉に聞く態度と人の言葉に聞く態度との間には深いつながりがあるということです。人の言葉に良く耳を傾けることができない人は神の言葉に対してもそうである。人の言葉に聞き入る姿勢を持っていない人が神の言葉にだけは静まって聞くということは通常あり得ない。そこには連続性あるいは共通性があるということです。

ヤコブは私たちが怒るにおそい人となるように、20 節で「人の怒りは、神の義を実現するものではありません」と言います。経験上、私たちも知っていますように、怒りはたいてい争いや仲違いや苦々しい結果を生みます。もちろんヤコブは正しい怒りまでは否定していません。もしそうだったら彼は 19 節で「怒るにおそく」とは言わず、「決して怒るな」と言ったでしょう。「怒るにおそく」という表現は、正しい怒りがあることを暗示します。しかし一方で「怒るにおそく」と言われていることは、私たちは余程慎重に自分を吟味しなければならないということを意味します。これは正当な怒りなのだと簡単に結論してはならない。仮にそう結論できると思っても、おそく結論しなければならない。そして私たちは 20 節のことばを心に刻むべきでしょう。「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。」このことを肝に銘じて、自分の言葉また怒りを正しく制御することを学ばなくてはなりません。私たちの普段の人間関係における態度は実は神との関係に大きくつながっているものなのです。

次の 21 節では、その御言葉に対する態度が述べられています。まずヤコブは「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去りなさい」と言います。これはイエス様が語られた種まきのたとえを思い起こすとイメージしやすいと思います。せっかく種が蒔かれても、そこが雑草や妨害物で一杯だと、種は成長することができません。他のものが場所を取り、御言葉の種を窒息させて、その命を枯らしてしまいます。今、「怒り」の問題が触れられましたが、怒りの感情に支配されていると、私たちは確かにみことばに

聞くことがほとんどできないでしょう。怒りの力がみことばを押しつぶしてしまいます。また 21 節の表現は、かつての古い生活に属するあらゆる考え、行ない、習慣を指しています。それらの悪を捨て去り、取り除くようにしなければならない。そうしてこそ御言葉が十分にその力を発揮するための良い土壌を整えることができます。

そしてより積極的な勧めとして、21 節の 2 行目から「心に植え付けられたみことばを、すなおに受け入れなさい」とあります。ある人は、植え付けられた御言葉を受け入れるとは話がおかしいのではないか。それはすでに受け入れているということではないのかと思うかもしれません。しかしヤコブはこの手紙をすでに御言葉を受け入れたクリスチャンたちに書いています。彼らの心にすでに御言葉は植えられています。しかし一度聞いたら、御言葉の働きは終わりになるわけではなく、これまで聞いた御言葉が繰り返し自分に特別の意味と力を持つという経験をした方も多くおられるのではないのでしょうか。御言葉の力は聞いた瞬間にしか、発揮されないではありません。それは蒔かれた後で芽を出し、茎を伸ばし、ぐんぐん成長するということが起こる。イエス様が種まきのたとえで 30 倍、60 倍、100 倍の実を結ぶと言われたように、心に植えられた御言葉をへりくだって受け入れて歩むと、それはとてつもない力を現すことになるのです。

そしてヤコブは、この「みことばはあなたがたのたましいを救うことができます」と言います。これはやがての最後の完全な救いを指しています。まさにこれこそ、この手紙の読者に対するヤコブのメッセージです。困難の中にある彼らを救いへ導くのは御言葉なのです。御言葉こそあなたがたのたましいを、すなわちその全存在を、最後の救いに至るまで導いてくれるものなのです。その御言葉の力に生かされるために、「聞くには早く」という特性を日々培うことが必要であり、また悪を捨て去ることが必要である。そうしてへりくだり、聞いた御言葉を受け入れるところに、あなたがたを救う神の豊かな力が現れ出る、とヤコブは言っているのです。

ヤコブはさらに進んで 22 節以降でもう一つの大事なことを語ります。それは御言葉を実行する人になりなさいということです。ただ聞くだけの者であってはいけない。いよいよヤコブ書らしいメッセージが語られます。このヤコブ書の「実践」を強調する言葉を聞いて、私たちは間違っ理解しないようにしなければなりません。彼は神の御言葉を聞いたら、後は人間の力で実践しなければならないと言っているわけではありません。聞くことは神の恵みに属すること、行なうことは私たちの責任であるという風に。

言い換えれば恵みが 50%、人間の行ないが 50%で、この両方が救いのために必要だと彼が言っているかのように。聖書が言っていることは良い実は良い木からできるということです。ですから私たちにとって大事なことは自分自身が良い木になることです。御言葉によって内側を新しくしていただくことです。しかしそうして良い木にされたなら、そこからは必ず良い実が生まれて来なければならない。だからそれが無い人、聞くばかりで行ないがさっぱり出て来ない人は、自分をだましてしているとヤコブは言っているのです。本当は神と正しい関係にないのに、自分はいつも御言葉を聞いているから、神と正しい関係にあると間違っただけで考えている。そう思い込んで自分を欺いていると。

御言葉を聞いても行なわない人について、23～24 節でこう言われています。「みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなようであったかを忘れてしまいます。」 私たちも鏡で自分の顔を見ます。特に朝、出かける前に、今日の自分の顔はどうだろうか、何か変なものがついていないか、寝癖はどうだろうか、等々。そうしてある程度整えてからその場を立ち去ります。そうして自分のなすべき働きにとりかかると、多くの人はそちらに関心や神経が集中して、自分がどんな顔をしていたか、ほとんど意識の関心から消えてしまいます。ある人は、いや私はそうではない。私はいつも鏡に映った自分の顔を良く覚えている。それどころか一日中、自分の顔はどうなっているか、髪型はどうなっているか、化粧はどうなっているか、頭から離れませんと言うかもしれません。しかしヤコブはそういうある意味で特殊な人のことではなく、一般的な人のことを考えています。少なくともこの手紙が書かれた当時、1 世紀のパレスチナで、多くの人はある時、鏡で自分の顔をまじまじと見つめても、その場を立ち去ると、そのことは忘れていく。日中の生活では頭の中の主要な関心からは消えている。御言葉を聞いても行なわない人は、それに似ていると言っているのです。ある時、御言葉のための時間を取ってじっくり接しても日常生活の多くの時間では忘れていく。従ってその生活に何の影響も与えない。

もう一方の御言葉を聞いて実行する人については 25 節にこうあります。「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。」 ここでの「律法」という言葉は、話の流れから考えて「みことば」と同じ意味で使われていると考えられます。こちらの人の特徴は、みことばを見るだけでなく、そこから離れないことです。一日のある時、御

言葉を読むだけでなく、それがその日一日、自分の生活を支配するように心に留めている。詩篇 1 篇前半の言葉が思い起こされます。「その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。」この人が見つめて離れないみことばが、ここでは「完全な律法」また「自由の律法」と言われています。「完全な律法」というのは、この律法は完全であり、完全な神を映し出しており、私たちが完全へと導くために十分ということでしょう。もう一つの「自由の律法」というのは、これは私たちに自由をもたらすということでしょう。一見、御言葉に従う生活は私たちから自由を奪うことのように人々は考えるかもしれませんが、しかし旧約聖書からすでに、たとえばレビ記 18 章 5 節に「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行なう人は、それによって生きる。」と言われていたように、それを守る人にいのちと祝福をもたらすものです。人間らしく生きる喜びと自由を与えるものです。この御言葉の力に押し出されて、これを見つめて離れない人は、事を実行する人になる。そしてその人はその行ないによって祝福されると言われています。先に 21 節で「みことばは、あなたがたのたましいを救う」と言われましたが、まさにこの人は、最後の救いにまで到達させる神の祝福に生かされる者となるのです。

この御言葉に照らして私たちの歩みはどうでしょうか。この手紙の読者であったクリスチャンたちにとっての誘惑は、御言葉に信頼するよりも、この世の方法でサバイバルすることでした。それまで住んでいたエルサレムを追われ、散らされ、行く先々で社会的・経済的に困難な状況に置かれる中で、神の知恵よりも人間の知恵に頼って生活しやすかった。金持ちと仲良くし、その地域での社会的地位を求めて、互いに争ったり、怒ったり……。しかしそんな彼らにエルサレム教会の牧師ヤコブは真の祝福の道は「御言葉に聞いて実行する道」であることを思い起こさせているのです。どのような試練の中にあるにしても、神が与えた試練を乗り越えて、さらに祝福された状態に達するための手段は御言葉である。その御言葉に聞き、これを行なうことが私たちのたましいを、すなわち私たち自身を、最後の救いへと導いてくれる。ですからこの御言葉により良く生かされるために「聞くには早く、語るには遅く、怒るには遅く」という性質を培うように、またすべての汚れや悪を捨て去って御言葉を素直に受け入れるように、そして聞くだけでなく実行する歩みへ進むように！とヤコブは語っているのではないのでしょうか。私たちの日々の御言葉に対する態度はどうでしょう。毎週礼拝で御言葉を聞いても、あるいは毎日個人的に聖書を読んでも、その時間を終えて聖書を閉じて、さあ次の仕事

と言って出て行くだけなら、鏡の前で自分の顔を見て、後は立ち去って何も心に残っていない人と同じになってしまいます。何の影響もその後の自分の生活に及ぼさない。そんな人になっていることはないでしょうか。私たちに与えられているのは完全な律法であり、自由を与える御言葉です。私たちはこれを見つめて離れない人、これを実行することにまで心を用いて歩む者でありたいと思います。そうする時、御言葉が私たちのたましいを救ってくれます。その人はその行ないを通して必ず祝福されるとヤコブは言っています。ここに試練をくぐり抜けて、やがて完全な者とされるために、私たちが選び取って行くべき神の定めた祝福の道があるとヤコブは教え示してくれているのです。